いの流水俳壇

「当季雑詠」

間　浩太選

糸とんぼ岩をかじりて岩にとぶ　片岡　包女

（評）幼虫、つまり「やご」の時を水中で過ごすところは、他の蜻蛉と同じだが、飛ぶ力が弱いため大形の蜻蛉のように遠くへ移動することがなく、水辺に近いところで暮らしている。糸蜻蛉の類はものに止まるとき、蝶のように羽を合わせる。糸蜻蛉は遠くまで飛べないので川では岩から岩へ飛んでいる。「岩にとまって岩にとぶ」を「岩をかじりて岩にとぶ」と言ったところを感心したものです。実際は岩をかじってはいないが、感覚的には噛みついているようにも、かじっているようにも見ることができる。

名句といわれる芭蕉の句に「閑かさや岩にしみいる蝉の声」が頭に浮かぶ。芭蕉の代表的名句の一つであり、蝉の句の最高峰といわれるが、この「しみいる」と「かじる」がともに極度に感覚的・即物的で、かつ抽象的であると言えないでしょうか。

玉葱の茎おり育つ底力　田蔦恵美子

（評）玉葱は、中央アジア原産といわれ、明治の初め渡来した。肉食が進むとともに普及した。貯蔵がきくので利用価値が高い。私も栽培しているが、この句のとおり、成長してくると茎が折れる。俄か農のため、はっきりした理由は知らないが、先輩に聞くと、自然に折れるが折れた方がよいとのこと。昔は折れるのが遅いものは、折っていたとのこと。

折れたら収穫してよいが、一週間くらいして収穫すると、玉に実がつまってよい玉葱になるとのことである。自然と折れて養分が葉先の方へいかずに実を充実するようにし、葉先は枯れてくる。この句の作者は、玉葱が自ら茎を折って葉を犠牲にして実をよくするのを底力と詠んだのでしょうか。茎が折れないと、茎の先端に「ぼうず」ができてよい玉葱にならないとのことである。

紫陽花の毬濡れながら色重ね　津田　久美

（評）花が開いてから順に色彩が変化するところから、七変化とか八仙花などの名がある。

花期は、比較的花ものの少ない、梅雨の最中になるため大がらの花姿が一段と目立つ。

他にも、「あずさい・よひら」などは古名で、かたしろぐさなどの名もある。紫陽花の句は、どの歳時記にも非常に多いですが、この句のように毬を詠んだのは手毬花の呼び名もあるのに意外に少なく感じました。この句の「濡れながら色重ね」とは、梅雨の川辺の紫陽花をよく見て詠んだと感じました。「かなしみはかたまり易し濃紫陽花」（岡田日郎作）紫陽花の句で私の好きな句です。

梅雨入りのことのみ記し今日仕舞う　川村　博子

（評）日記を毎日毎日休まず記入するのは、よほどの努力をしないと継続できないもので、私も3年日記を長期間書いていますが、最近は怠けて空白の日が多くなっています。

継続する人に感心します。

この句の作者は、日記を記入し、農作業をされていると思います。梅雨入りまでは雨が少なく、諸（いも）など野菜の植え付け、田を鋤くのも困っていましたが、梅雨入りで雨となり農作業も忙しくなり、疲れて日記も梅雨入りと書くのみで一日が終わったとのことで、農繁期の農家の暮らしが推測される句です。

初取りの茄子の重みをたしかめる　岡本とも子
じっと見るじっと聴く雨音の向こう側　秋田　律子
婆ひとりことこと植うる棚田かな　竹崎　光子
七変化透かして見たき人ごころ　小野川町子
人去りてまた人去りて濃紫陽花　大川　節弥
万緑の遠き雲より水の音　野田　京子
ほととぎす白夜の如き神の森（男山）　岡村　嘉夫
足長のジーパン穴夏来たる　友草　水月
鈴蘭や夫婦に言葉要らぬ日々　松尾満津於
幸先の子感葛切り喉を越す　植田　紀子
手の甲へメモするナース梅雨の蝶　井上　郁子
葉桜となる頃なじむランドセル　刈谷　志津
お静かに牡丹の散って仕舞うから　竹崎たかひろ
ふるさとの土つきらっきょ買いにけり　伊藤　たみ
山波をくっきりそめし椎の花　弘瀬うき子
更けし夜の出で湯の窓に群れ蛍　筒井　正子
寂しさや蛍の明かり今は見ず　森岡　照月
鯉の背の押し分けてゆく花筏　間　浩太

次題　「当季雑詠」五句
締め切り　毎月五日

投句先
社会教育課
いの町3597
☎893―2012

募集

第18回 森木敏雄旗争奪 ソフトボール大会（スローピッチ大会）

主催　いの町体育会
日時　9月4日(日)　8時30分～
場所　いの町総合運動場
参加料　1チーム　2,000円
申込・問い合わせ　9月1日(木)19時までに、いの町体育会ソフトボール部高橋まで電話でお申し込みください。
☎090―5140―7441